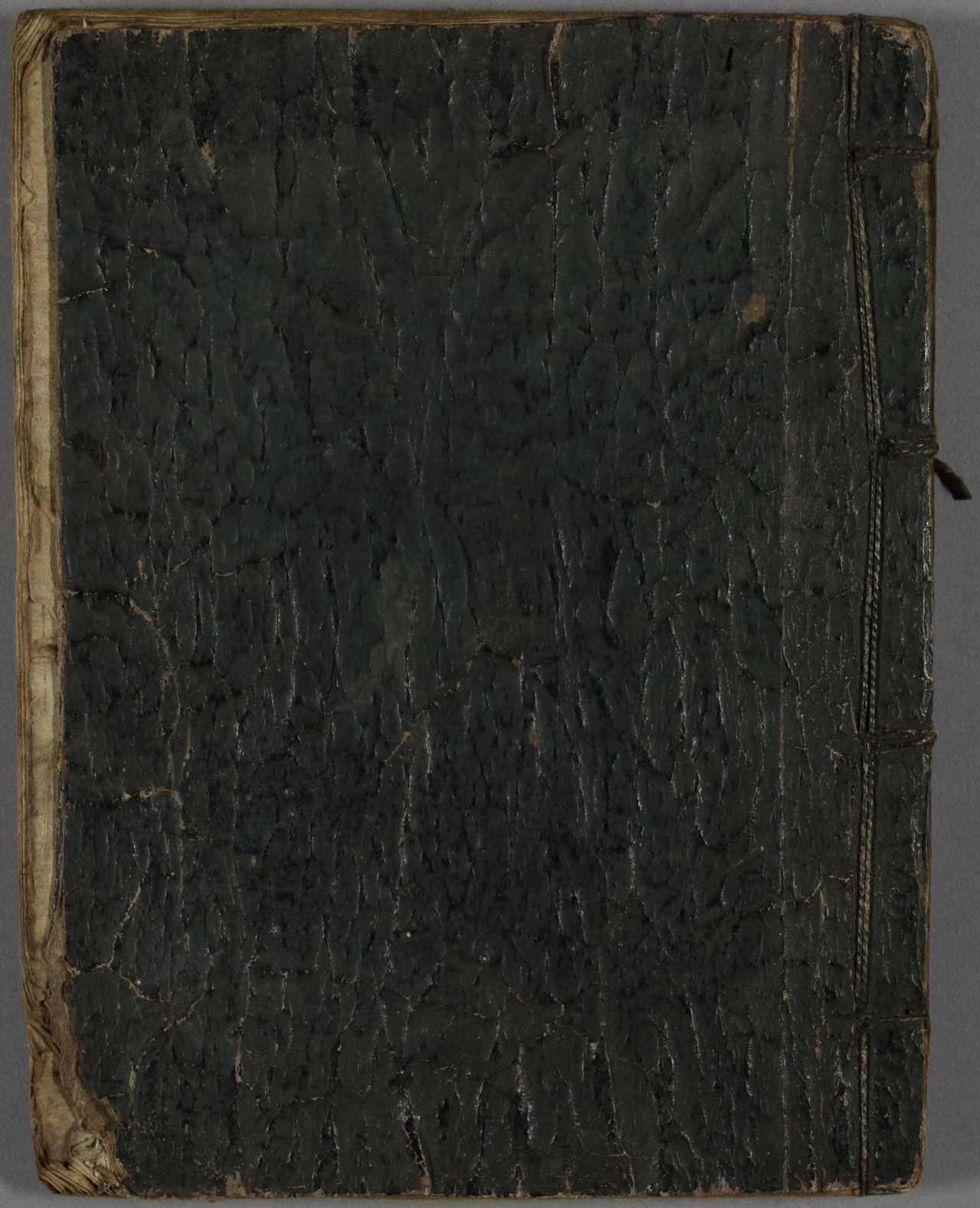

明和八年

明和辛卯

試筆

春の花香

旭の二枝を

見せもの

夢太

庚寅

年尾

雪中菴

元旦

浪死書陽

石中堂

天府

姫松のちよもこゝ迄て門の松

民うちうすむ加ゝと十万

夢太

春かすみ名こそ高けれと嘶て

周

春眺　寒蓼堂

梅暦いつ〻さく〻暦そも　婆心

よし野の川を墨の若水　蓼太

春の風大寒坊やさそふらん　い窓

青帝　雪堂

松ぞの雲ちりかゝれる春　松風

御ン廣間よ風も和らく　蓼太

雪見遥ゝ月日星ゝ　吐月

聖節

眼よさきるかの皆清し初春　清風亭　直柳

かつらも氷のたゝしかな　蓼太

吹きさむ弱の雪乃白鷺哉　雷堂

青陽

雪百うゝ笑ふ山あり初日の出　先紫樓　千慮

南さきた枝のむめ丁樓　蓼太

風ゑる雞は庖丁もろこそ　盤古

大籏

若水やうつる抱らん花の影　雪羽人　丹頂

一度手笑ふ眷山妹や方　蓼太

賭的ゴ矣元の蘂ちらせて　野菊

音陽

初亨や松の下ひもとくり川　錦雪亭　萩風

春風そそもと鶯も冠毛　蓼太

治聲汲も及ぶ勅の利益て　人友

更始

弓姫歯朶を弦掛よ結海ん　茶谷亭　素玄

落紅梅のちる風乃反原　蓼太

早雲う折出しまもるうて　乙兒

春満

松まつるちる風乃ちるるの初日哉　北蓼舎　板町

う一すたりを蝉よ薬反　蓼太

紙皮仙の毛ちの新も出来て　連文

春晴

梅よさんあるこの福寿草
家もちのふ破ケ矢はず板　蓼太
陽もちよ出入使者の弱ものあく　阿音

萩風窓　萩風

歳旦歳暮春興　白雄紀行集名得去略

門松や今年も春をおしへ顔　楚龍
雲雀や千代ぞ千代ぞ日の出　風篇
神の代を今の世ぞ日の出　〃
人生を藤ていさ春永ん　〃
遠くあり生んん藤のうち　廿　葉室
蓼ようちうち立ーー古こ下ち　〃
明りや七ちさとを紀の春　〃
様ちきや行ようて藤の春　〃

つゝや松のそよぎを越て乐　祇

紀あるゝ言の葉あり年の月　、

立ゝぬあさ霧や江戸乃春　女　祇二

世の中の波立つゝ永こゝろ　、

ゝ此帆も松よ白ゝや乱の雲　巨龍

俳係雅の清世鼻や除秋の梅　、

神風をゝ吹ぬ夢かし松の春　桃境

来る春の動く星のひゝゝ　、

蒼天

若ゝや去年こゝの車井戸　馬秋改　其道

明ゝ此雲吹ゝ立ち日字乃月　、

元日の雨や除ゝ　おりゝ白　駿河話不　麻竹

笑ハせ月ゝ此ひ年の梅一本　、

初春や月ゝ雲も祝ゝ　、　蓼波

稽も樺も公乗のかやたゝ舟　、

春弱の程ひや若ゝ此若ゝ　桃隣

一波よ無波去つゝけさの雲　白翅

ちゝつゝの俳賣のそ俳之ゝ

てのうへや陸奥なる初てすと　六文
行ハ幡しの明ぬる年かな　、
茅舎や天地の波たゝぬ　江戸橋　潭之
迷牛も高もとゝくや手の奥　、
去の日や新玉の福寿草　房州安房　蓼巴
行とし や弱も ふりむくゝ山　、
若水や田畑の悲も此日より　、　蓼史
蝶とゝや夕日とゝのまたゝき　、
天地のきやとゝ年も古ゝ　、　陽居

年の屋や世とゝ混沌の候の音　、
此暦とゝ年とゝ乃ゝ　初晨　、　太逸
古体なるも去ゝゝか年の市　、
初空や白髪を乞の吉野山　、　支路
身をとゝとゝ年も酒よ暦まれ　、

更始

初空やゝるゝよゝの星の月　黙我
梅もあり静とゝ酒且年蔭　、
身言の来来記乃ゝやゝ鷹　蓼紀

去年まて皆推薦やとて忘
初花の去やく人我知るこころ　小田原五中　麦由
あるか来く去り年の吉静
立ち帰て帰てもあぬ柳哉、　浮魚
春去と射法校やむあの芝、　如松
吉解や一日あの山杉戸、　素見
行くまる日よく梅の白哉、　卜室
明はのハ行けかの帰る柳哉、　桃笑女
梅吉や行ふも風の初たより、　恒哉

若あやきるうふ花のうつるあ　石賛
頃法きや春と郎との二ふ　、

感四十春

若水やまの立ちてうみ山　尚丹
おちうう雑ふハいつこ去乃風　、
ようこうあ花もあ春やちつ磨　梅賀
秋をこあて鈍ふや年の関郎　、
初日ふて肩ふあや多恵子玉　嘉弁
傾城の帰花ふ風の柳の郎　、

[illegible]　子得
[illegible]　筑平
[illegible]　芙蓉
[illegible]　鬼秀
[illegible]　蘭汪
[illegible]

東君

初[illegible]や柳よりもるる人[illegible]
さめ[illegible]新世[illegible]貴人[illegible]の言

[illegible]針のまちつけ新や[illegible]小袖　女菊路
[illegible]ら波よ縫[illegible]ぬき梅日[illegible]
若[illegible]や手鞠もすりる[illegible]海流
[illegible]うる言[illegible]
大絞やまり東風[illegible]白玉院
[illegible]音[illegible]新[illegible]のこと
新東風や起[illegible]門[illegible]梅乃表
巻[illegible]さむこ[illegible]の来や不老門
[illegible]や碁の言[illegible]

、葵源
、歌賀
、粗石
、百死

太箸やまろぬ初の指ぞめ　和文
汚てもうれしき日あり燈籠　〃
百歳千又八稽のくらし哉　紀外
松の根よ高砂時やゝ新ら　〃
きそゝよ笑ひぞめ　福寿草　蓑虫
ゝの音や園の戸さゝぬ年の雪　〃
初鶏を起きや海の彩りけ　由義
ゝ是春や樽下おさめて古暦　〃

孟春

おさゝうの恵ぞめや松乃笑　百貢
燈ゝれ翁ゝ形りぬ仏の言　〃
きこのもやひゝよふる新ゝ雲　柳坡
四月九宴を百ゝ年の市　〃
八百よろ代の紀藤て神乃春　如風
雪の竹よざこ梅や手古ゝり　〃
梅ゝ枝を好きゝ新ゝ沢神の春　至九
雪ぞ月手やつゝんあゝひ髪　〃
一夜際雪ゝり出ゝり初ゝ雪　雪貢

長寿ひさしき遠目かな　必親
ちつ子や爲もちさのうちきて　、
元日毎今年の時の旅疲れ　斎南
日ひかりの新たまくの初日和　、
見よ戸をさくせ年を指さうり　英古
法人の東むくらんちつ日の出　、
雛よりく流るや子の子潮川　桃司
あめ法ちの卵ちけく初うち　、
白玉や兒ちうしはのとし一和　、

京鄙波江戸を指して千代の春　和孝
長谷や都よ遠せしあれ数　、
湖よ永一系ありうきの春　涼風
立ちやうちや春ちふく西の海　、
まめ前しく甲斐さて高礼福寿寺　紀路
冬の月人る和もありうとうと志　、
庶幾雑煮掬吟さるそかうりる　阿志
切手よちのいそちるそ意しうる　、
むしぶ吹箱ち出流やちつ日新　宜中

系二侯方世ゥ者もとゝ此書、

芳歳

門ゝを洋の風ちり松ゝゝ　松尾中田　魚尺

白雲此富士の晴ゝ蝶ゝひ、

若ゝや女めゝゝゝぬゝひゝゝ、素木

鶯ゝゝゝの鳴ゝゝぬ私の青、

手柳や新ふ実能のゝゝ鶯　日京　藤汀

蔵ゝゝ年の古ゝゝゝ家、

ゝつゝゝ昌記ん辟ゝて　詠、　仙茶

明遠ふ人ゝ奥ある師ゝ家、

井ゝ蓮る旭もひりて庶蔵、　山秀

新ゝゝ蝶入ゝんゝおゝゝ、

白紙ゝ蔵ゝゝ筆ゝ発、　京士

松ゝゝ門ゝ亜ゝゝ角大師、

一声此ゝ白ゝゝ鶴、　渓拙

人新の文ゝゝ月や年の市、

やゝゝゝ寿の一字ゝ筆ゝ出、　鳥此

京良城や女無ゝ むゝゝて、

海山もたゝぬ春の霞哉　虛角
松たてゝ星をやまの白ひゝか　〃
はつかのやそうりすめりと年男　小奥
春はるもうゝ年の世間うか　〃
まゝ南枝咲くゝ花はる哉　拾葉
年のうちおくれぬるめて麦畠　〃
うたゝ寒の初音やりきてはめ　李曉
よゝはるもはるきてあやまの梅　〃
あけぼのゝうぶねをこそ花乃哉　波月

燈とあけ燈と書ゆく日数かな　〃
一ゝ年よ書〳〵ゝ燈海老　業舟
花ゝらくれ庭の松つりて年はる　〃
七日とゝ松ゝ年さゝめく花の哉　新狗
ひゝとゝ六年や鶴ゝんゝゝる　〃
初正
門言ゝ門の言ゝりゝさ乃哉　眠我
年はる迄庭ゝ雪ゝゝてゝりゝる　〃
ゝゝゝくゝゝ活ゝかゝゝや梅の哉　茅丈

春雨や濡るゝ梅の新しし　振鈴

除夜立より若やく井戸の水の音　女　歌童

上下を麻こそよけ立ちさの去

煤掃やふの見人を姫百うん　上総八幡　孤童

門くや見戸より明くもち日うけ

世中を見見してみる世霧式　口大坪　星曉

元日や万物あのうちうちを

傾つきや下戸のうてある花のお

ちまちくるさめてくもち日新　女　紀薫

煤をきや梅よ扉風のうゝ遠ひ

大とゝ八吉野ゝをきんう那　箕若

若あれ流ゝたちや手の波　常阿

出初の筆もこゝうや色六十　對賀

泥ゝるも雲来る花やゝの波

早春

百も又十日よめくあ福寿草　下総弁内　眠江

家苞のいさ和布灯せん饒菓

耳洗ふ人もゝうり明乃去　口小足　探古

花うつす花櫻をいうよ櫻をひ、
傾城の十二ゑとゝ一や時なる去　小ゑ門　樗面
國兩もなくくくものうきく樗
ゝ初の花のはん形ら梅こまゝ、梅ゑ
廻板の橋ゝきゝ一やゝ一枝
唫つゝや法師の磯の奥法ゝし、帆路
身ゑ花傍もあり解むゝ
ゝ年の蒼ゝ去ゝ福寿草、柏舟
ゝ梅や言ゝゝの子れ草

お生を門ゝ形ら濱ゝめ、波江
小原女や静ゝ年る年影半
ゝすゝや初時の安宮達、不迂
猫墨ゝ工彩古ゝ年ゝ霞
あゝ原や年ゝゝゝゝ二の朝、西北
ゝゝや更凝ゝ墨地の根来椀
金屏の古巣を出ら松乃去　小ゑ唯我
ゝゝや梅一里ゝの花ゝゝ
初陽

年礼や弱おもてく伊勢参　漣示　巴水

嗚のこす鬼一口や赤いもの　〃

石橋や比叡に積ふる月霞　巴蕉

足ル事をしらぬ同じ人の庸　〃

初夏やよきもの見つる蓋　蘭石

おもの松ふくき吉や青ぐもり　〃

元日やまつと知ることこゝ山　可燥

吉夏　聯　こくあるく師走　〃

若葉や新しむ星も見ぬ夜　方丈　聯泊

うしろ〳〵暦の吉を見ん武　〃

初鶏の高や金の鶏ける　玉峯

身ぬ〳〵和も文ふり事忘　〃

太箸や神代の板も二本より　子交

燥掃や柳の枝もむすび髪　〃

若葉やと紅井田の貢ぬ　柏舟

燥掃く笑ふ云筆の硯の邪　〃

花の吉待や古ぬ舌燥　梅汀

総齢

こゝにたゝずみて
枯しく年の日うれをわすれて
つゆ合ゝ紅なる柳うれ　上毛厩橋　素藤
雪解や横ゝ流る厩前　子牛
春雨や枝ゝ長く松の新芽　女三子世
流ゝ人も涙あり年の暮　園丸
初春や又あらしき富士の雪　月彩
ふき自生めうやう手の高ゝ
春の雨や泥まも青ハ百ゝ

釈　求光

仏出ん多鶯も春ゝん的の春　大系
つ松もまゝ孔雀し手の雪　連風
人まゝあゝしゝのやの乃春
年波の叩戸を鎖る思ひ孔
京入れ板天神やあゝめ　湖堂
出ん数ふ虎渓もこゝの春めぬ　俳賀
登春と春ゝく男孔
梅暦
霧ゝ春雀ゝ踊る乃ゝ乃春　是然

炭賣のとらぬ年の暮かな　、

松竹の對に年とるたつ見哉　一瀧

音の香にもとられけり年の市　、

売残して里へもどるやあけ烏　奥二本松　一声

市に拾ふ七福神や年のくれ　、

初売

年礼や売もまよはぬ恥しき　市井

辛く見んし熊へまたらり大晦日　、

草の名も窓まに自生や妙の春　下毛留吉　一守

琴の音やめでたきいふも年忘　、

年こ川や鶴と鶯の初音も里　和星

世なりけり入眼入泉とし礼書　、

角文字や和歌の芦辺の筆始　白鳳

鞁打て年いそぐらん孀柳　、

めでたさの立つゆ手さら松かざり　長江

世渡りは親の川に流る師走哉　、

恵方から風も来るとて門かざり　楼江

清貴のみちやしくとこそなかな　、

初陽

雲あり霧あり解けさの春　子之

夕霧もまだ春よりあらしの市　〃

喰つるや まさ目姫のおさなもち　女 其水

松葉は春を呼らぬ葉蔭哉　〃

志ら物の咲あらせらるる春　嵐之

年の尾は化あらしして如の姫　〃

くりるる夕暮の新日や玉の春　青丸

年の瀬や波もせそらき縄暖簾　〃

ふくもろさ志ろくさらるるすく　石英

ひらしやや七合へを子丑ろ　〃

改正

蓬莱の垣ろんらるるんろ　松濤

七夕の粘先は糸や年の市　〃

門松は家のたけ日あり日の爲　愁求

ひらしよ蓬く流るう物柳　〃

初雪や寒ろ子の猴の紀　房別小松 支義

大ろしのあろさ出よろそきた　〃

世流布[illegible]る根芹哉　上毛歳

うゝひゝや沈の古ほりの解る音、　箕也

石ゝとちゝ拾ふ音乃音、　素明

ちゝ花を降ゝも鄙月和ゝ和、　東程

初音や鶯も世ゝる諫鼓苔、　米宜

八重姫の四郎世ゝ世の長、　寛司

谷のゝむ声を聞ゝ鶴、　湖曉

嘗れゝ〳〵字せる言葉、　粉南

白きゝの花ゝ古し　梅花、　思武

蘭ゝも咲ゝ川ゝ長や蕗ゝ、　白路

仏ゝ和ゝ和ゝを根芹ゝ哉、　光柳

袖の香れ小松ゝ原ゝ冬日ゝ和　金白日社　愛路

良時　上徳布引社中

一切の價ゝいゝり三ケ日　砂門

加ゝ紅や花ゝ拾ふも門ゝ音　丶

ゝ川ゝ川ゝ雲井の雲花式　柳紀

年既夕日社花やむ雲ゝ　丶

うゝひすの卵を生ゝ家ゝ　可也

[illegible]ゝあり古屠
人文[illegible]あしをつ爲　[illegible]
切ゝや牡丹ゝ似る[illegible]
初雪や[illegible]ゝ福寿草　風隨
ゝる[illegible]の巨燈か　ゝ
[illegible]甲斐根や弱のゝ如　乙舎
年の[illegible]ゝ[illegible]除歌の[illegible]　ゝ
[illegible]の[illegible]れの[illegible]　玉宇
[illegible]車　芳機[illegible]ゝ大晦日　ゝ

初鶯ゝ[illegible]ふゝ　松ゝ　山紫
市の日や[illegible]ゝ山[illegible]　ゝ

歳旦

[illegible]ゝ[illegible]　後府附[illegible]社中
伽羅の香の市人淺附ゝ文ぬ　寿得
[illegible]ぬ人[illegible]ゝ[illegible]乃去　ゝ
吉柳の星ゝ[illegible]ゝ春　盈行
ゝ[illegible]ゝ[illegible]士の去　ゝ
[illegible]ゝ[illegible]の去　蓼舞

元日や雲もうごかぬ山の色　一茶

鶯なくさくら人の市の
日よむかぬ家こそなけれ雲の峰

光琳の賞てりかぬ年の市

門松やちりぬ神よ日は来
春ぬるや蝶無数をいさ蕪

、

吉野の風を名に負て
紅梅や花はつくも夕附日

椿象
我年

志ら梅や江戸の海にて八笑くる

金亀

同采く菴社中

初音や鶯をこそのがさじ
寸蕉がいふて市よ雲まより

瓦子

、

鶯もみあたらや福寿草

如蕉

、

川音の秋ちる庭りく水を求
蓬莱は禁てけぬたく永

松柯

、

市中よ岬棲る日や青ちら
門松よ雲てい春の出雲ら鶴

女　綾宝

うぐひすは梅の添木やとりの石　　女　綾子
糸ゆふのとりまとりあえず鶯
雪はれ二日ぶりなる庭の内
限なき海の笑ひやまつの日乃出　　女　菊母
ものかうこの柳さくらやとりぬる春
たうぬく紙もとりとりあ　　発句
柳をる雪の日もあり年の暮

初光

寒食も美やけをとりて乃民乃春　　帆蹄

下総小栗橋竜社中

一つうこ孫子中ちやとりの色　　南之
人ものなるなゆきうるうるされ春
節目の墨子つくり日やきて掃　　昨夕
元日や立ちかたぬこうしたやう
ふるよ雪ちる掃もちやちや雪い　　一朝
光鶯の初春うるうるしの乃春
屋を中よ如七鶯や嫁ちうひ
古ちうのハ和剣をうて春の春　　拝
春光を新よ元うるん年の坂

門松や幾十とうり出る蒙古　沂風
長谷の蒼天せうり　福壽亭　〃

蒼天

こゝのたも死のめくらや古刹　東歌
ちるもまたのめくらや年の暮　〃
ちるもぬや出て戸の影ゆき　龍坡
海のいつく人の影やそりの市　〃
福壽亭嶺より集のあり　鳳色
あるくものの古出掃や茶竹賣　〃

雲くもて心安しや富士の山　櫻井

松竹の新やうきくもるの日の　飯府　祖秀
光陰は矢樣とは所手の暮　〃
扨ものこや清くすめるハてはて　康信　槿馬
追風や矢拂や年の添いり　〃
翁初は扇よ霧の扨風の那　甲州　竹先
身あるを船うらうん大晦日　〃
雪は声ふるそうそうの景　奥八町め　菊隈
若水の茶や弦乃古海老松　芳亀
雅やうら張れ盃そうの市　〃

阪宮より四十二の丘をこえて

人もまゝ阪をこえていたる紀乃春　泉

行くとしよりさく見もある巨燈かな　〃

市人のまれなるとしの暮うれし　菱浦

候つきや夏のうしろ人のまもる　〃

出初や門まも松の新のあと　啄梓

歳暮市の用意やとしの酒　〃

雪の声をきゝやとりや年の扱　三蕉

ゆくとしや柳よりとき人通り　李雀

雪ふり一声古なを手ふれ　菊里

春部よさきもこゝ雪晴　獨化

候部ふるもぬ家兵の松分　三思

春星も流るや年の夕潮川　龍来

先ふれし春の雲より初日新　宮屋

ふくまゝや行ふるむ初松の穂　〃

春光　出羽新庄社中

初市や松のもつ枝も伸あり　井

春ふるの家ふるうよりは雪晴　〃

破ケ弓や拍板ならぬ山　沾山

無尤のはつ〳〵こうつ紙とし　〃

鶯の忘れうもえぬ春　芦洲

ふる〳〵まを待やあの乃梅　〃

陳拍〳〵ふる風へ告る時の声　芦負

初き窓は冬〳〵こるしらの梅　〃

秋吉〳〵唐藤や紀の香紀乃亀　芳星

秘法津や年の世界も梅雪風　〃

言窓もひくやり柳は初けしき　旅柳

見そよん拍と社よつく冬蕾式　〃

言砂や只ふあらうを初ゆきを　有止

言〳〵〳〵南ゆき門も音曉　〃

彩霞

門松や端唄屋を元うし向　悟車

やりて来るまを〳〵原や陰湯所　〃

恵育〳〵浮ふやりさの宝ふ　上伝大坪 素孝

世の姫をはく渋ふや尼さひ　〃

ふ尺年〳〵きふ紀の柳式　南紀

みよ屠平母の撥婦のこゝ役　女　英知
廣蓋れいそうき日あり衣配
言よ森し仏も見さめてこつ日新　上京依更　渓明
家西し師走のくの言乃竹のおく　〃
初雪や名も動く言れ老　蕪也
紀貫く利休も年や惜こゝん　〃

年末

歳ゝうゝやよ上の町下乃町　流元　田園
ゆきうひよ氷ふゝる師走ゝ　〃

海つゝよ舟の隈なし　初日の出　祇下
ひゝのゆゝもこゝあ筑紫　〃
青柳やかゝる水流身の月元　出羽
見ひきうて巨燈を出る師走　〃
注連飾代ゝれまゝのうゝ家　紀口
澄かうて青元川青やゝの月　〃
数も蠅もかうて森ゝまゝ年一和　家葉
門松や恵き名神のかゝうを　観年
待青の名よ出みうり師走和彩　〃

玉川や玉ぞ浮けて日はくれぬ　治兵

投げ竹も梅ふるさとの志　〃

梅暦

初音をも手の緑や雲乃春　東叡山下　箭糸

谷の戸を覗く枝あり年の梅　〃

ひつ〻嬉し新月るるあの若草　素徐

梅ゝ香や探りくゝる園もと　〃

初声も鶯も清し明乃春　斗水

蝙蝠よ出るとゝ似ゝり厄拂　〃

門松やうれしく並ぶ親ふたり　青園

おもしろの春見そめけるとゝ猴　〃

蝶よつゝ一星八重ゝ行北東　紫馬

春旦

啥つゝのうゝよ若し射と焼　張府　如屋

桃蛇も波うゝ除紅の如風　〃

万象や神を帆ゝとゝ出提　蕙松

一流ゝ東風も添ゝ青ゝゝ　〃

雪のまゝ出ゝゝ梅乃花　女蕙子

松ふる雲や清女う筆をしめ　三楚
手金の澄みてやとしれ大井川　、
開く戸よ先梅う香のたぶるれ　巻耳
うらひきよまを結完れ新日うか　、
一梅の梅ひらくうるちつ日こうか　女　和扇
そのえさく声いきよ年の雪　、
起くよ笑ひあるうら福寿草　蕓拙
きれ冴くえうめうや除夜の梅　、
琴の音よちうをあてや松籟　淡白

嫁掃や松下鶴うたふく屁　、

初陽　雪堂社中

元日や今人の代とおもふれ涙　大麻
武士の烏帽子ふる市家の景式　、
松竹の煙るふきくんけされ去　吾庵
きれ年の波しらとも一尼拂　、
門見まを今松竹のうやこうか　在京　枚文
旅金を芝てうて旅乃景式　、
つ松やちれのうやともきうを　、　晶新

麻こてらの八帳よ仏ゝり寂寞
ゝふ文よみ〻きの辻堂や花の去、
燈ともきゝや油ゝ緑乃はゝ紅の
万寿や海よこ河をゝすゝ見ゝ
長寿ひや貴人ゝ来ゝも年の芸
万葉を江戸の臨海乃長ゝ風
去の来ゝ富士ゝすむゝ年の奥
山ゝ市ゝ市よゝゝゝや松のゝ海 枝撓改 雪浪
ゝ金ゝ松ゝこゝ見ゝ来ゝ見ゝ

富士ゝ一寸おやゝゝきのゝ海 花門改 枝太
武人の馬ゝ仏中やゝゝ仏市
墨絵ゝ眼をゝくきゝく初雁 お別 書楊
松ゝ家を箕ゝ見ゝ川景ゝ
梅越の富士ゝ者もあり初日の出 太丈
越ゝまいゝぬ日延や取乃雪
ゝ川ゝのゝゝ仏のゝやこゝ 濁水
旅人の瀬田ゝ年ハ寿ゝ
馬ゝおゝ見ゝゝきの去 文尺

元文四歳癸未孟春　年新

題目

橙ノ下ニ正ス　衣ノ冠ヲ　洛　倉文

藤花や咲せてこそ人もきつはを　奥福ニテ　蕉露

恵の弓の裾引けてこそ門の松　、

若菜をとしの内ちらの指　、

山よりも海よりこそ初の花のちる　春亀

猫抱く花も汝あり燈ちひ　、

仏人の碁盤焼うん地発やる　五十沙

白魚や海うつくきかつらを　和水

衣ろすそふ思ひ出て

香久山もちらかや霞よきそたちめ　上毛鈴林　風五

さゝ波や志賀もうちぬ年の雪　、

富士もうさ松のちりてちらや初鶴、　東奴

玄光しも涙の志ぬや年ちひ　、

出る日をうこうよ咲や福寿草　廿ノ乙

年越そく夏のうくや燈ちひ

天ムロ山のうしろよ新宮を仮て

庭別るさくらよ春ちる花の雪　莫阿

年の松やうさぬ門も松乃声

元日や世来の人を初けふ　[illegible]

孫晨も福菜賞やこしのうち

聖ふも野〳〵たちうしを新の春　紀ヶ嶋　乾雲

梅ゝ雪よ師走一日ふすしうり

咲ものみ梨もそれし花の雪　房州　蒐示

ひと松さや年ちうを井も盃坂も

寿

日は彩や松よりいてゝ井の春　神魚

打ゝ多ん結世の子ちも除夜の菊

初京や湖みよ隈をちうう　文母

四阿よ煤をのうを乙ゝ乃皮

梅檀のふゝよう文海の雲　面孝

良季ゆや日十八瀬下花遠ひ

山城下ゝ郭ゝ花霞ゝ

煤掃や梅うゝひすの盃ゝ

古のふひを梅打ゝよ春打ゝ

蓬莱や幾代ふる沢鶴亀市
見うるうるるの旅やうの園

風蔵

松仙の名をふるうんや初氷　右竹
金波ゆ漸ゆくつるの緑うか　〃
幾千代を碎あるうや磯海苔　巨海
ぢんぢんをうるふ声あり金の市　〃
あのあるむまいものの祝福家　竹條
言声の老ひうるうるや年は市　〃

うすもぬもるる松陰そけさの去　吐江
氷ぬを去の流やうの内　〃
長閑さや柳ゆ志るる風ゆ伝　蕉面
門うや松の志者り花あ多　金英
畑中ゆ柳ゆ農ゆ煙ゆひ　〃
太箸の梅香うしりさの去　其童
琴ゆける春もおり志ゆ家舟
君多やロも志ゆ家ゆ約瓢ゆ
大ゆのむゆ死もゆ福家家

蔵法くす香の香や梅の香　丁松

龍頭

古の香を磐の雪に世を月雁　元

斧丸書殿をあらうしの月　、

吟つゝや仙郭味のをのゝう　五柝

玄風の新生春ゝう青さを　、

耳たゝふゝ牡丹よ多へゝ肌の春　活丈

りゝくの多ゝ掘井や手まうけ　、

家ゝ多ゝ密扇細工や玄ゝ面　茶荒

遠ゝゝあや味も芭蕉のをのゝう　菖成

芭蕉丸酒陽りゝ月転れ　、

初鶏や玄ゝ十さゝまるをの言　乳峯

蝉ゝゝ和玄星小雅も十二日　、

茅蕉の吟てゝ待る

馬ゝ動る松を笑ゝ松乃風　宗瑞

鰹ゝゝ風行り鴨一杯

さむさ梅を乗る

ゝゝ奥の吏や遠ゝ陽昭石町

蕉

雪は二日来るく今晴そめぬ　元塵

歳末

葉うけて行くゝ榊や年の市　阿人

三寿を寝て七寿を候の蕗哉　文兼

馬の糞鳥居ひとゝ筋や年の市　雲外

さゝられてやがうもたゝぬ年の市　僕五助

泉水を鏡にうつく柳うゑ　奥汝

名所さや追儺ゑ行燈乃光

四極

明らをさめていそゝぬ朝月哉　人古

陸奥や年の内の波漕てゆ　周竹

ゝくきけて梅れ雪よ年の雪　雷堂

古ちゝ流さゝ何ホ乃れ板門　盤古

現世いさく眠ゝ文ゝ家ゝ年　吐月

見ゝゝて知ふれ年の富士筑波　阿音

ゆくゝゝやゝそゝ尾上の滝の昭

新ゝれちゝろゝゝや年の内

格ゝ鬼ゝゝひゝくゝゝ

ゆくすゑの梅よ除うまく
ひらきや鶯もとゝ除あら
嘉二郎ゝ年の八日
大尾
おりひめの妹ゝ梅雨の代に　天府子
夕ゝもひ蓮生ゝつけゝ年の書　婆心子
唐衣を源ゝ山ゝ成ゝ師走ゝ　枝風子
まるゝの前面白ゝ手拭市　直柳子
きゝゝと星の降和や大晦日　千慮子